漁海況予報関係事業
(新漁業管理制度推進情報提供事業)

(抄　録)

佐藤　晋一・仲村　俊毅・大川　光則・黄金崎　栄一・高橋　進吾

漁　　況

平成9年の漁況の特徴は日本海のウスメバルが過去8年間で最高を記録したのをはじめ、日本海の底建網等で漁獲されるブリ、タイ、津軽海峡及び北部日本海のヤリイカも引き続き高水準となったことであった。スルメイカも全県的に好調な漁獲をみせた。また、八戸のまき網、陸奥湾内の定置網によるマサバ漁獲量が上向いてきた。

マイワシは八戸、平舘及び日本海側でも不調で、日本海のマサバも不調であった。日本海のアブラツノザメは引き続き低水準で、鰺ケ沢以南のヤリイカも低水準となった。

沿岸域におけるスルメイカ一本釣漁は、近年では好調であった前年度の70～90%にとどまったものの、過去8年平均値の 1.2～ 1.4倍と引き続き好調を維持していた。海域別にみると日本海側では7月にピークをむかえ、2,302トンの水揚げがみられた。津軽海峡側では10月にピークをむかえ、10月としては過去8年で最高の1,780トンを記録した。太平洋側の白糠では前年と同じ7月にピークをむかえたものの、水揚げ量は690トンと前年の63%にとどまった。また、八戸では9月に2,450トンのピークをむかえた。

日本海の定置網・底建網で漁獲されるマダイは前年の78%にとどまったものの88トンを記録し、1985年以降では1992年、96年に次いで多い漁獲量となった。

主とし定置網で漁獲される日本海のブリは419トンが水揚げされ、過去12年平均の3.3倍と1985年以降最高を記録した。

太平洋のまき網で漁獲されるマサバは3年続きの不漁となっていたが、本年は5万8千トンを記録し、ここ9年間では2番目に多い結果となった。日本海のマサバは0.7トンで、1985年以降最低の皆無状態となった。

資源減少が危惧されている太平洋のまき網によるマイワシ漁も1トンと最低記録を更新した。日本海の定置網で漁獲されるマイワシも前年に引き続いて1トンを割り、1985年以降最低となった。

海　　況

平成9年度の青森県沿岸の海況は、日本海沿岸定線観測・太平洋沖合定線観測結果から求めた対馬暖流（日本海）・津軽暖流（太平洋）の流勢指標を平年と比較することで表現すると次のとおりである。なお、日本海及び太平洋の観測定線図を図1に、流勢指標の暖流幅、津軽暖流張り出し位置、水塊深度については、その模式図を図2及び図3に示した。また、平年比較の基準については、章末「参考」に示した。

発表誌名：平成9年度漁海況予報関係事業結果報告書

1　日本海（観測月３～６月、８～12月、各月１回）

平成９年の青森県日本海沖合における対馬暖流域の水温は３月から９月までは高め、10月から12月は低めで推移した。対馬暖流の勢力は、定線観測結果によると５月及び９月は強め、10月には弱めとなっていたと思われた。

表面水温は３月から８月まで高めで、６月にははなはだ高めとなった。50ｍ層水温は５月にはなはだ高め、10月はかなり低めであった。100ｍ層水温は11月にやや高め、12月にやや低めであったが、年を通じて平年並みに経過した。

100ｍ５℃等温線の岸からの位置で対馬暖流の流幅をみると、舳作崎線では３～４月やや狭め、８月やや広め、９月にははなはだ広めとなった。その後は10～12月にやや狭め～かなり狭めに推移した。また、十三線では４月及び８～10月やや広めであったが、12月にはかなり狭めとなった。５～９月及び12月は舳作線と同様の傾向を示した。

水塊深度を７℃等温線の最深度でみると、４月はやや浅め、５月はやや深めで、６月にはかなり浅めとなっていた。また、10～12月もやや浅めに推移した。

対馬暖流の北上流量を水深300ｍ層を無流面とした地衡流量でみると、年間を通じてやや多めとやや少なめをくり返す変動をみせていた。12月にはかなり多めとなっていた。

2　太平洋（観測月　３月、６月、９月、11月、各月１回）

平成９年の青森県太平洋沖合における津軽暖流の勢力は、３月にかなり弱く、その後は概ね平年並に推移した。

表面水温は６月にやや高めの他は平年並であった。50ｍ層水温は３月にやや低めであった。100ｍ層水温も３月にやや低めであったが、６月及び９月はやや高めとなった。

津軽暖流の深さを尻屋崎線における７℃等温線の最深度でみると、３月には最高水温が６℃台だったため、水塊深度としてはとらえられなかった。これは前年と同様の結果となった。６月には平年並みにもどったものの、９月には再びやや浅めとなった。

津軽暖流の張り出し位置を尻屋崎線における100ｍ５℃以上塩分33.7psu 以上の東端位置でみると、９月はかなり西偏（弱め）していた。

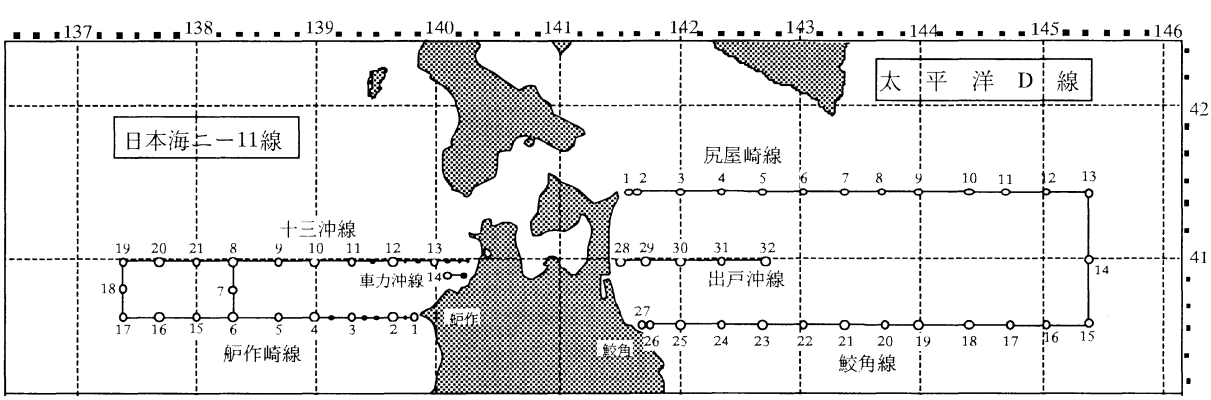


図１　太平洋及び日本海の観測定線

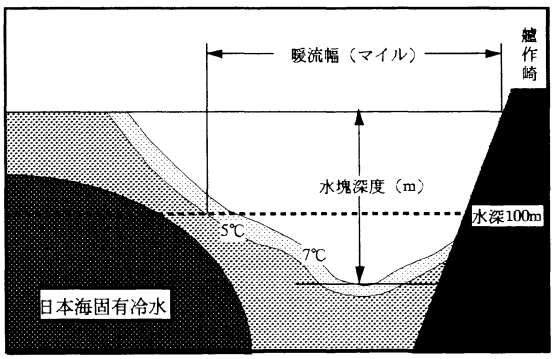


図２　舳作崎鉛直断面模式図

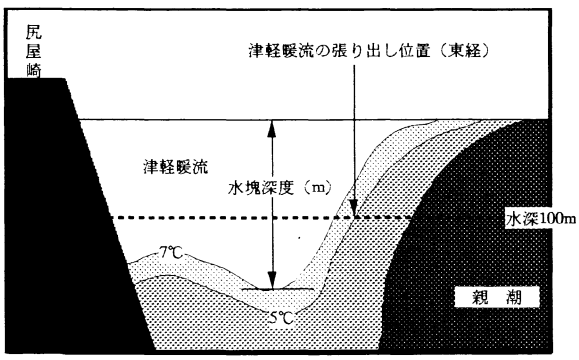
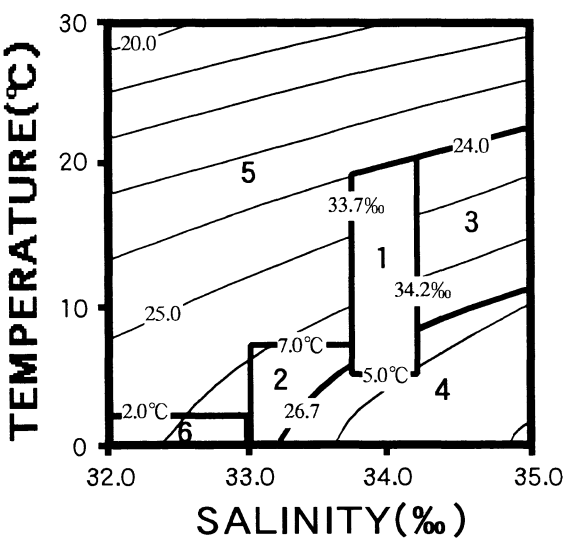


図３　尻屋崎鉛直断面模式図



1. 津軽暖流系水
2. 親潮系水
3. 黒潮系暖水
4. 底層冷水
5. 表層水
6. 沿岸親潮系水

図４　花輪、三寺（1986年）等の水塊分類法
津軽暖流水は塩分33.7～34.2psu 、水温５℃以上、
密度（６ｔ）24.0以下で規定される。

参考　平年比較の度合い（気象庁の海面水温偏差の階級区分を参考にした）

表　現	偏差比（標準偏差に対する割合）		
はなはだ高い	＋200％以上		（およそ44年に１回の発生に相当）
かなり高い	＋130％以上	＋200％未満	（およそ14年に１回の発生に相当）
やや高い	＋60％以上	＋130％未満	（およそ６年に１回の発生に相当）
平年並	－60％以上	＋60％未満	（およそ２年に１回の発生に相当）
やや低い	－130％以上	－60％未満	（およそ６年に１回の発生に相当）
かなり低い	－200％以上	－130％未満	（およそ14年に１回の発生に相当）
はなはだ低い		－200％未満	（およそ44年に１回の発生に相当）